

## 第57回卒業証書授与式 式 辞

校庭に 暖かな風が吹きはじめ、日増しに春のきざしを感じる 今日のおき日に、神戸市立垂水東中学校第57回卒業証書授与式を挙げていきますことは、この上ない喜びであり教職員共々、心より感謝申し上げます。

本日は、公私ともご多用の中、神戸市教育委員会事務局、各学校の校長先生方、PTA会長様、各地域の代表の皆様方とこのように多数のご来賓、保護者やご家族の皆様のご臨席を賜りましたこと、心からお礼を申し上げます。

只今、140名の卒業生のみなさんに、卒業証書を授与いたしました。ご卒業おめでとうございます。今、皆さんが手にした卒業証書は、九年間の義務教育を終了したことを示す「あかし」であるとともに、多くの方々の思いが、たくさんつまった、そして世界に一つしかない証書であります。どうぞ、この証書の重みをじっくりかみしめてください。

卒業を迎えた57回生が中学校入学にあたり、学校生活への期待を記した文節の一説を紹介します。「中学生になってわくわくして、楽しみな気持ちでいっぱいです。これからどんどん忙しくなって、くじけそうになることがあっても、強い心を持って、前向きに進んでいきたいです。最後には『楽しかった』と言えるように、今からの時間を大切に、不安なことは友達と乗り越えていきたいです。」

あの日から三年、様々な経験と思いをむねに、今、卒業していきます。57回生は、この作文にあるように、男女の分け隔てなく仲の良い、多くの生徒は歌が好きで、さわやかな学年でした。そして、学校や学年行事などでは、「常に垂水東中学校の顔」として数々の成果を学校内外で上げました。その活躍の一部分になりますが、柔道部は、男子個人戦 県大会上位入賞、陸上部は、男女で個人種目 県大会へ出場するなど、全ての運動部で、最後まであきらめない全力で戦うその精神は、垂東の伝統でもあると思います。放送部は、NHK放送コンテスト朗読部門で県大会入賞、吹奏楽部は県大会出場など文化部各部において、特色ある活動・個性豊かな作品や展示・地域での発表などがありました。その表現力には、感動しました。

修学旅行では、知覧特攻平和会館にて、平和祈念セレモニーとして、「HEIWAの鐘」を全員で合唱し、平和宣言も行いました。保護者への感謝と命の尊さを深く学ぶ時間となりました。

体育大会では、学年・学校がひとつとなって、真剣な面持ちで力強く披露した組体操 とマスゲーム。多くの方の記憶に残っています。垂水東の組体操は、今年度で最後となりましたが、これからも長く語り継がれることと思います。このような皆さんの姿には、頼もしさを感じると共に、誇りに思います。数々の功績を築き上げた57回生に賛辞を送ります。

1・2年生の皆さんは、三年生から多くのことを学びました。今後は、垂水東中学校の伝統を継承すると共に、さらに進化・発展することを期待します。

卒業生の門出にあたり、皆さんに贈る言葉は、「天職に生きる」です。私自身いつも大切に考えている言葉です。現在、皆さんも感じている通り、大きな社会情勢改革の波が 押し寄せてきています。そのスピードや姿は、予測することができない程です。人工知能AIや物がインターネットと接続する技術IoTの急速な発達、そして、これらの技術の開発に関する国際的な競争は、激しさや加速化が増えています。このような時代だからこそ、皆さんには、自分の持って生まれた素晴らしい天性・個性があり、その秘めた特技・能力に気付いてほしいということです。

具体的には、次の進路先でも、多くの様々なことを経験し、挑戦と修正を繰り返しながら、「自分にはこれが持ち味だ！」というものに、一生懸命に取り組み、磨きをかけ、継続する。それがやがて、大きな力となり、自分の夢を語り、未来を支えてくれる源(みなもと)となります。そして、自分の可能性を信じると共に、常に周りの人達への感謝と思いやりの気持ちを忘れず信頼される人として、生きていくことを願います。

最後になりましたが、保護者やご家族の皆様、心身ともにたくましく成長されたお子様を前にしてさぞや感慨もひとしおのことと拝察いたします。ご卒業を心よりお祝い申し上げます。この三年間、教職員一丸となって、特色ある教育活動に取り組ませていただきました。時にいたらない点もあったと思いますが、本校の教育に常に温かいご理解とご協力を賜りましたこと深く感謝申し上げます。今後も引き続き、ご支援いただきますようよろしくお願いいたします。

さあ、卒業生の皆さん、140通りの 新しい世界に向かって、胸を張って、笑顔で、さわやかに飛び立ってください。皆さんの前途に幸多かれとお祈りし、式辞と致します。



令和2年3月17日 神戸市立垂水東中学校 校長 鈴木 茂士

57 回生の皆さん、卒業おめでとうございます。

入学試験の追い込みの最中に休校になったり、卒業式が延期になったりして随分やきもきされたことでしょう。卒業式に在校生も保護者も参加できないことも大変残念です。

実は、私も大学を卒業するときに阪神大震災に遭いました。卒業式も何もなくなってしまいました。それどころか、卒業試験もなくなって、おかげで私は無事卒業できたのです。あの時、いつも通りに試験があったら、多分私は落第していたので、決まっていた進学もできなくなり、大きく人生が狂っていたことでしょう。震災のおかげで私は何とか暮らしているとも言えます。もちろん震災のせいで人生を失った人も、大切な人を失った人もいます。ことの軽重は違いますがモノゴトは一面では判断できません。どんなひどいことの中にも良いことはあります。今年中学校を卒業する 2004 年度生まれの日本人は皆おおむね同じ体験をしています。きっと同じ年なら皆共感できる良い昔話になります。

震災の話をもう少ししましょう。私は 1994 年 10 月に劇団を立ち上げ、1995 年の 2 月末の旗揚げ公演にむけて稽古をしているまっ最中でした。公演約 1 ヶ月前の 1 月 17 日に地震があったのです。我が家はひびが入った程度でしたから、板宿や長田に住む友達の安否を尋ねて、焦げ臭い街中を自転車で走り回りました。水を届けたり、いろいろしたりしているうちに 10 日たちました。そして、私たちの旗揚げ公演をどうするか、メンバーが集まって話しあう事になりました。家を失ったメンバーはいませんでした。親戚を亡くした人もいましたし、生まれ育った町がひどい状態になっているときに芝居なんかしている気になれないという人もいました。ボランティアをするべきだという人もいました。

当然だと思いました。多分やらないという人の方が正しいと思いました。しかし、私は芝居がしたかった。最悪、一人でも今から稽古をして舞台に立とうと思いました。ところが、メンバー 11 人中 5 人は、やりたいと言ったのです。そこで私たちはやることにしました。新しいメンバーを集めました。稽古場を探しました。メンバーの一人は稽古場を貸してもらおうと公民館に電話して、「避難している人でいっぱいだ、何を言っているんだ」と、怒鳴られました。そらそうですよね。

本番当日は大阪の仲間が手伝いに来てくれました。辞めたメンバーも手伝ってくれました。仕上がった舞台が素晴らしかったとは思いません。無理に無理を重ねて仕上げた芝居でしたから。でも、私にとってはとても大きな財産になっています。その時一緒にがんばったメンバーは今でも一緒に芝居を創っています。その時避難所から観に来てくれた仲間の顔は忘れません。私自身の覚悟も定まりました。あの大変な状況の中で、ボランティアもせずに芝居をするを選んだのに、そう簡単に芝居を辞めることはできないでしょう。

危機に見舞われたときにその人の本当の姿がでます。それは正しいとか正しくないとかではなく、ただ本当の姿というだけです。何を大切に考えているのか、何を優先して動くのか。今まさに日本の社会の本当の姿が見えている瞬間です。震災やコロナのように社会全体に関わる危機であっても、ごく個人的な危機であっても同じです。危機は意識していないかもしれない自分の姿を明らかにしてくれます。逆に言えば、危機に自分がどのように対処するかを想像すれば自分の本当の姿が見えます。危機を想像して、自分を鍛えておくことが、いざ危機に遭ったときにあなた自身を助けてくれると思います。

想像力は大事ですよ。では、長い旅になると思いますが、元気で行ってらっしゃい。垂水東中学校はいつまでたっても皆さんの母校です。

2020 年 3 月 17 日 PTA 会長武谷嘉之